ゆう薬局

患者さんの最適な治療のために ベクトルを合わせる医師、栄養士、薬剤師

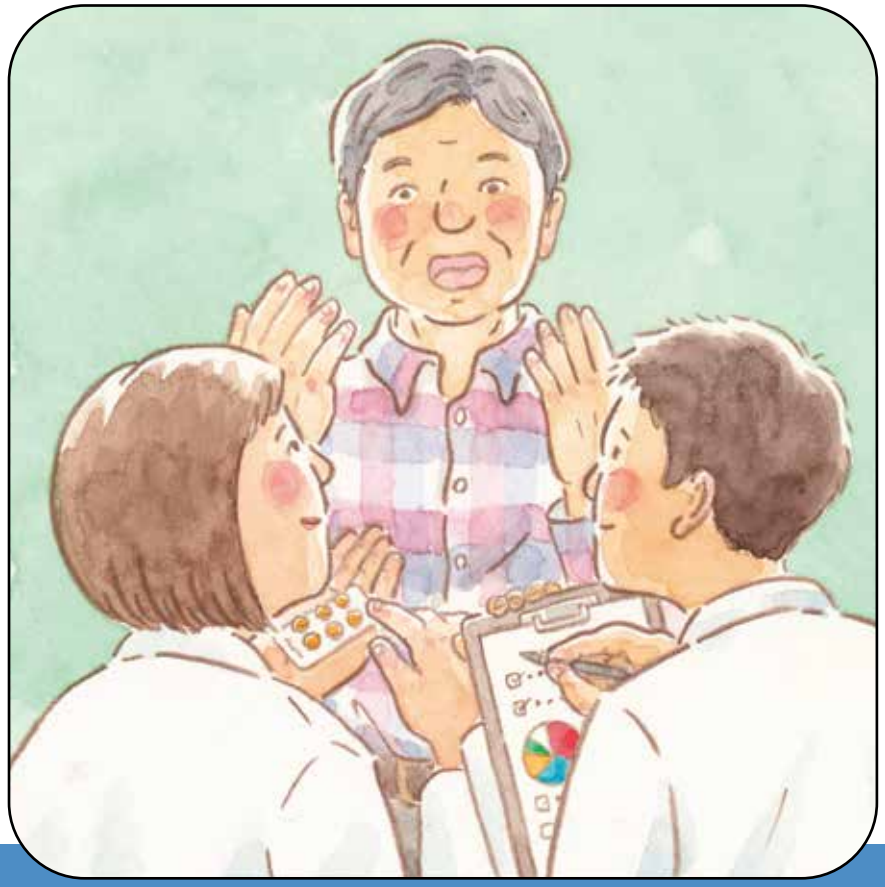
城陽市にあるゆう薬局の薬剤師Sさんは4年前に病院勤めから転職しました。ここで出会ったのが、糖尿病患者で60代の岸さん(仮)。長く続けている内服治療では血糖値が安定せず、医師の処方箋には「自分で注射するインスリン療法しかないが、患者さんが嫌がっている」と書いてありました。糖尿病が進むと、血管が詰まり脳梗塞や心筋梗塞の恐れもあります。ゆう薬局では、常駐する管理栄養士が、医師の依頼で患者さんへの栄養指導も行っています。薬剤師として岸さんをフォローしたいと考えたSさんも、医師の了承を得て、管理栄養士による栄養指導に加わりました。

岸さんは薬局でリラックスした様子で、管理栄養士とSさんに、インスリンを嫌がる理由を話してくれました。以前、別の疾病で経験した自己注射の苦痛がトラウマであること、「インスリンは一生」と聞き、恐怖感があること。Sさんは話を聞き、合併症のリスクや、インスリンは採血やワクチン注射より痛みが少なく、医師と相談して内服薬に戻れる可能性はゼロでないことを説明、「いつでも話を伺いますね」とも加えました。

すると岸さんはひと月半後、インスリン療法を受けることを決心。「親身に話を聞いてもらい、納得できました。これからも栄養指導をよろしくお願いします!」。

調剤薬局は病院とは違い、いつでも気軽に相談できる医療機関。でも実は患者さんを支える重要な役目を担っています。そのひとつは「医師に言えない」患者さんの本音や生活の把握です。「お腹が張るから薬は飲んでいない」「禁止されているものを実は食べている」等、効果が出ない本当の理由がわかれば薬の変更や食事の提案に導けます。また患者さんの普段の様子から、薬について客観的な判断をするのも薬局の大きな役割です。

患者さんにとってベストな医療のためには、医師と栄養士、薬剤師が情報を共有し、ベクトルを合わせることも不可欠です。ゆう薬局の薬剤師はそんな医療の支え手として、今日も患者さんを見守っているのです。



ゆう薬局 ハンケイ500m物語 vol.18

なんでも相談できる「ゆう薬局」には、お客さまとの物語があります。

豆知識

ゆう薬局の管理栄養士

ゆう薬局には、現在34名の管理栄養士が在籍しています。薬剤師と一緒に栄養面からのサポートも行っていますので、食事に関することなどぜひ気軽にご相談ください。

ゆう薬局グループ本部・宇野薬局

☎075-771-1690(本部)
京都市左京区浄土寺下馬場町106

もよりバス停は「錦林車庫前」